

五十嵐 啓

略歴

- 2001年 東京大学大学院 医科学専攻 修士課程入学（三期生）
- 2007年 同博士課程終了（医学博士、指導教授 森憲作先生）
- 2007年 日本学術振興会 特別研究員(PD)
- 2009年 ノルウェー科学技術大学 研究員
- 2016年より カリフォルニア大学アーバイン校医学部・神経科学解剖学科
Assistant Professor
- 2016年-2019年 JST さきがけ研究者

医科学専攻から世界へ踏み出そう

私は 2001 年に東京大学理学部生物化学科を卒業し、医科学専攻に進学しました。高校生のころから脳科学を研究したいと考えていましたが、脳科学を中心的に研究しているのは医学系研究科でしたので、同研究科に進学することのできる医科学修士課程が 1999 年に設立されたのは私にとって朗報でした。立花隆著「脳を究める」で紹介されていた森憲作先生の「構造のシンプルな嗅覚系は脳を理解する良いモデル系となる」というアイデアが大変面白いと思っていたところ、森先生が理研から同専攻に移られたと聞き、すぐに森研への参加を決意しました。私たちの入学したころの医科学専攻は、すべての同期生が研究室を決めておらず、半年間まず講義や実習を受けました。週一回論文紹介の自主セミナーを開いて交代で発表をしたり、毎週金曜には講義室でお酒を飲んだりしたのはとても楽しい思い出です。

医科学修士につづく博士課程、さらに若干のポストクまでの間、森研究室で嗅覚の神経回路研究を行いました。森先生は「まだ誰も旗を立ててないところに、旗を立てる研究をして下さい」とよく言われました。この指針のもと、未解明だった高次嗅覚野（嗅皮質）の神経回路の研究に取り組みましたが、あれこれ手法を変えてなんとか自分で納得できる結果を出し、論文が出たのは始めてから 7 年もあとのことでした (Igarashi et al., J Neurosci 2012)。この結果はいまでは高次嗅覚経路を明らかにした論文として神経科学の教科書に掲載されています。大学院生には解けきれないような大問題を解こうとしていた大学院生活は、当時としてはとても苦しかったのですが、今から思えばいい経験だったのかもしれません。

この研究から、嗅覚回路が記憶の回路に直接神経投射を行っていることが分かったのですが、この回路がどのような意味を持つのかを調べたいと思うようになり、当時記憶回路の研究でとても面白い研究をし始めていたノルウェー科学技術大学のモーザー博士夫妻の研究室に移り、記憶行動中のラットの外側嗅内皮質が連想記憶に関与することを見いだしました (Igarashi et al., Nature 2014)。ボス夫妻が 2014 年にノーベル賞を受賞したのはとてもいい思い出です。その後、2016 年から研究室をアメリカでもつことになり、現在はカリフォルニア大学アーバイン校で連想記憶とアルツハイマー病の研究を行い、医学部生と大学院生の教育に携わっています (www.igarashilab.org)。

当時大学院生だった私にとって、大学院の先生方は世界トップレベルの科学を生み出す英雄たちでした。2019年の医科学修士20周年記念の集いの際に、お世話になった先生方と一緒に写真を撮らせていただきましたが、大学院生だった当時から20年近く経ったいま、自分が当時の先生方のようになれているのか？と考えるとまだまだのように思います。しかし、修士1年の免疫学の講義で谷口維紹先生が引用されたダヴィンチの言葉「師を越えることのできない弟子は怠惰である」を常に心に刻みつつ、師を越えるべく新しい科学を生み出していきたいと思っています。

医科学専攻の研究室は常に世界のなかでもトップレベルの研究を生み出し続けており、医科学では世界トップレベルの研究に身を置く事ができます。また、医科学出身者のネットワークも貴重です。医科学の先輩、後輩とは学会があればいまでも集まって飲んだりしますし、先輩から後輩へとアカデミックポスト探しの指南をするなど、世界中に散らばる卒業生は密接に支えあっています。ぜひみなさんもこの医科学専攻で研究者としての第一歩を踏み出してみませんか？



卒業後12年経って、医科学専攻の先生方と。左より、谷口維紹先生、宮下保司先生、清水孝雄先生、岡田康志先生、宮園浩平先生、高橋智幸先生。中央が五十嵐。